

新書紹介

ソフト・エネルギー・パス

エイモリー・ロビンズ著

室田泰弘・槌屋治紀 訳

時事通信社 B6版 一、八〇〇円

エネルギー危機がいわれだしから、もうかなりになる。エネルギー危機とは、いったい何だろうか。日本は今日、自由世界第二位というGNPを有し、豊かさを誇っている。そして、これからも今以上の豊かさを求めていくことが当然の前提とされ、しかしながらその豊かさの基礎となるエネルギーが、量的にたりなくなる。それが「危機」だということであろう。石油に頼っている日本を考えると、石油については、まず量的な欠乏がはじまり（反論もあるが）、価格は引きつづき騰貴してゆく、ということ、二重に手に入れ難くなることは明らか

であろう。そのために、石炭を液化し、原子力を使おうと考えられている。とくに、原子力が救世主とみなされている。しかし、原子力は救世主になりえるのだろうか。まず立地難（住民が反対するのは決して理由のないことではないと思えるが）、稼働率の低さ、建設に要す資本の膨大さ、時間の長さ等々を考えると、とても救世主にはなりえないのではないかと思える。とすればこのままでいくと、良かれ悪しかれ、今の豊かさは近いうちにエネルギーの面からくずれてゆくのではなからうかと悲観するのは、あやまっているだろうか。まして、環境問題をそ

の上に考えあわせたとき、ダメおしの感を禁じえない。日本は袋小路に入っていると思えてならなかった。

前段を過去形で書いたのは、本書を読んで、もしかしら袋小路を抜けだせるのではないかと感じさせられたからである。本書は、一章にわたり数字をあげて論証しつつ、説得力ある書き方をしている。本書の内容は素人にも（素人だから）充分納得できると思えるが、どうだろうか。著者の主張を私なりに整理してみると、まず、今までのエネルギー危機論争の前提を疑う。今までは必要とされるエネルギーの量のみの発想しかなく、質の面が無視されている。今の技術、エネルギー形態を与件とし、エネルギー増大を単に将来へ延長して見積り、その量をいかに確保するかだけを考えている。だからエネルギー不足と思えるのだ。例えば、部屋を二〇度に暖めるのに何千度も熱を有す石油を燃やし、電力に換え、遠方から送り、また熱に換えて使用する。なんたるムダか、ということである。そう

いうことをせず、必要なエネルギーの質にあわせたものを、地域分散化して手にいれればよく、エネルギー源としては、太陽熱、風力、波力、生物転換システム等の「フロー」を使うことで充分まかなえるのだと主張している。フローは無尽蔵である。題名のソフト・エネルギー・パスは彼の造語であり、最終需要の質に合わせたエネルギーを、地域に分散したフローの施設から得ようというものである。対する「ハード・パス」とは、従来からの大規模・集中立地施設による化石燃料、合成燃料、原子力等のストックに頼るものをさしている。そして、ハードとソフトの比較を行い、ソフトの優位性を論じている。しかし現在の政策がハード一本やりに近く、しかもハードとソフトは二者択一的であり、時間とともに方向変換は困難になってゆく。だからこそ、今のうちにソフトへむかおうというのである。

本書で彼がのべているハードの困難さは、いまいち理にかなっていると思える。ソフトを選

択することはこれから世界でもいちばんエネルギー問題に苦しむであろう日本が、まず切り開く道といえるのではなからうか。本書の内容は、日本にとつて大変魅力のある事柄であり、それだけにさまざまのところでとりあげられ、また批判もされている。車の燃料、土地の狭い日本の限界等々。しかし、石油がなくなる、だから原子力だ、という前に、いま一度、考えてみるべきであり、そのいみでも是非読むべき価値のある一冊といえよう。

へ都市科学研究室主査 富永修